



立て心よ 行け私よ

No. 12

【問題解決力】 【他者関係力】 【自己更新力】

文責:中村 文成

校長講話より 「21世紀に生きる君たちへ」

2月13日(木)、今年度最後の校長講話が放送で行われました。外は雪。事前に配付された資料に目を落としながら、全校が校長先生のお話に聞き入りました。



司馬遼太郎さんを知っていますか？歴史小説家、ノンフィクション作家、評論家として活躍しました。『龍馬がゆく』『国盗り物語』『坂の上の雲』『翔ぶが如く』等、数々の有名な長編作品があります。NHKの大河ドラマや特別ドラマになった作品も多くあります。

その司馬さんが、1989年平成元年に小学校6年生の国語教科書への掲載のために書かれた随筆・エッセイを紹介します。題名は「21世紀に生きる君たちへ」です。もう既に、21世紀も25年を迎え、

4半世紀が過ぎました。まさしく今、その21世紀にあなた達は生きています。

司馬遼太郎さんはこのエッセイを執筆してから数年後、21世紀を待たずして1996年平成8年72歳で亡くなりました。

このエッセイを最後の校長講話として今回、皆さんに紹介します。そう思っていたのはずいぶん前でした。そんな折り、2年生が立志式で『立て心よ』と共に『決意』という曲を歌いました。その歌詞は、作詞者が「この『21世紀に生きる君たちへ』を始めとした司馬遼太郎さんが託した想いを未来に伝えたい」という願いで作った歌詞、アンサーソング的なものです。そうしたことを2年生は音楽で学習したそうですので、二番煎じにはなってしまいますが、改めて聞いてください。



「21世紀に生きる君たちへ」(司馬遼太郎)

私は歴史小説を書いてきた。もともと歴史が好きなのである。両親を愛するようにして、歴史を愛している。歴史とはなんでしょう、と聞かれる時、「それは、大きな世界です。かつて存在した何億という人生がそこにつめこまれている世界なのです」と、答えることにしている。

私には、幸い、この世に素晴らしい友人がいる。歴史の中にもいる。そこには、この世で求めがたいほどに素晴らしい人たちがいて、私の日常を、はげましたり、なぐさめたりしてくれているのである。だから、私は少なくとも二千年以上の時間の中を、生きているようなものだと思っている。この楽しさは――もし君たちさえそう望むなら――おすそ分けしてあげたいほどである。

ただ、さびしく思うことがある。私が持っていない、君たちだけが持っている大きなものがある。未来というものである。私の人生は、すでに持ち時間が少ない。例えば、二十一世紀というものを見ることができないにちがいない。

君たちは、ちがう。二十一世紀をたっぷり見ることができるばかりか、そのかがやかしいにない手でもある。もし「未来」という町角で、私が君たちを呼びとめることができたなら、どんなにいいだろう。

「田中君、ちょっとかがいますが、あなたが今歩いている二十一世紀とは、どんな世の中でしょう。」

そのように質問して、君たちに教えてもらいたいのだが、ただ、残念にも、その「未来」という町角には、私はもういない。

だから、君たちと話ができるのは、今のうちだということである。もっとも、私には二十一世紀のことなど、とても予測できない。ただ、私に言えることがある。それは、歴史から学んだ人間の生き方の基本的なことどもである。

昔も今も、また未来においても変わらないことがある。そこに空気と水、それに土などという自然があって、人間や他の動植物、さらには微生物にいたるまでが、それに依存しつつ生きていくということである。自然こそ不変の価値なのである。なぜならば、人間は空気を吸うことなく生きることができないし、水分をとることがなければ、かわいて死んでしまう。

さて、自然という「不変のもの」を基準に置いて、人間のことを考えてみたい。人間は――くり返すようだが――自然によって生かされてきた。古代でも中世でも自然こそ神々であるとした。このことは、少しも誤っていないのである。歴史の中の人々は、自然をおそれ、その力をあがめ、自分たちの上にあるものとして身をつつしんできた。

この態度は、近代や現代に入って少しゆらいだ。――人間こそ、いちばんえらい存在だ。という、思いあがった考えが頭をもたげた。二十世紀という現代は、ある意味では、自然へのおそれがうすくなった時代といっている。

同時に、人間は決しておろかではない。思いあがるということとはおよそ逆のことも、あわせ考えた。つまり、私ども人間とは自然の一部にすぎない、というすなおな考えである。

このことは、古代の賢者も考えたし、また十九世紀の医学もそのように考えた。ある意味では平凡な事実にすぎないこのことを、二十世紀の科学は、科学の事実として、人々の前にくりひろげてみせた。

二十世紀末の人間たちは、このことを知ることによって、古代や中世に神をおそれたように、再び自然をおそれるようになった。おそらく、自然に対しいばかりかえていた時代は、二十一世紀に近づくにつれて、終わっていくにちがいない。

「人間は、自分で生きていくのではなく、大きな存在によって生かされている」と、中世の人々は、ヨーロッパにおいても東洋においても、そのようにへりくだって考えていた。この考えは、近代に入ってゆらいだとはいえ、近ごろ再び、人間たちはこのよき思想を取りもどしつつあるように思われる。この自然へのすなおな態度こそ、二十一世紀への希望であり、君たちへの期待でもある。そういうすなおさを君たちが持ち、その気分をひろめてほしいのである。

さて、君たち自身のことである。君たちは、いつの時代でもそうであったように、自己を確立せねばならない。――自分にきびしく、相手にはやさしく。という自己を。そして、すなおでかしこい自己を。二十一世紀においては、特にそのことが重要である。

二十一世紀にあっては、科学と技術がもっと発達するだろう。科学・技術が、こう水のように人間をのみこんでしまってはならない。川の水を正しく流すように、君たちのしっかりした自己が、科学と技術を支配し、よい方向に持って行ってほしいのである。

右において、私は「自己」ということをしきりに言った。自己といっても、自己中心におちいつてはならない。人間は助け合って生きているのである。私は、人という文字を見るとき、しばしば感動する。ななめの画がたがいに支え合って、構成されているのである。そのことでも分かるように、人間は、社会をつくって生きている。社会とは、支え合う仕組みということである。原始時代の社会は小さかった。家族を中心とした社会だった。それがしだいに大きな社会になり、今は、国家と世界という社会をつくり、たがいが助け合いながら生きているのである。

自然物としての人間は、決して孤立して生きられるようにはつくられていない。このため、助け合う、ということが、人間にとって、大きな道徳になっている。助け合うという気持ちや行動のものとは、いたわりという感情である。他人の痛みを感じることに言ってもいい。やさしさと言いかえてもいい。

「いたわり」「他人の痛みを感じること」「やさしさ」みな似たような言葉である。この三つの言葉は、もともと一つの根から出ているのである。根といっても、本能ではない。だから、私たちは訓練をしてそれを身につけねばならないのである。

その訓練とは、簡単なことである。例えば、友達がころぶ。ああ痛かったろうな、と感じる気持ちを、そのつど自分の中でつくりあげていきさえすればよい。この根っこの感情が、自分の中でしっかり根づいていけば、他民族へのいたわりという気持ちもわき出てくる。君たちさえ、そういう自己をつくって

いけば、二十一世紀は人類が仲よしで暮らせる時代になるにちがいない。

鎌倉時代の武士たちは、「たのもしさ」ということを、たいせつにしてきた。人間は、いつの時代でもたのもしい人格を持たねばならない。人間というのは、男女とも、たのもしくない人格に魅力を感じないのである。

もう一度くり返そう。さきに私は自己を確立せよ、と言った。自分にきびしく、相手にはやさしく、とも言った。いたわりという言葉も使った。それらを訓練せよ、とも言った。それらを訓練することで、自己が確立されていくのである。そして、”たのもしい君たち”になっていくのである。

以上のことは、いつの時代になっても、人間が生きていく上で、欠かすことができない心がまえというものである。

君たち。君たちはつねに晴れあがった空のように、たかだかとした心を持たねばならない。同時に、ずっしりとたくましい足どりで、大地をふみしめつつ歩かねばならない。私は、君たちの心の中の最も美しいものを見つづけながら、以上のことを書いた。書き終わって、君たちの未来が、真夏の太陽のようにかがやいているように感じた。

(平成元年「小学校国語六年下」大阪書籍)

「さきに私は自己を確立せよ、と言った。自分には厳しく、あいてにはやさしく、とも言った。それらを訓練せよ、とも言った。それらを訓練することで、自己が確立されていく」このフレーズはまさしく「立て心よ 行け私よ 立て心よ 行けあなたよ」に通ずるもの、まさしくそのものだと思いました。



生きている…、ということは誰にでも与えられている権利ではありません。もちろん、義務でもありません。でも、人は必ず選ばれて生まれてきたのだと信じていたいのです。

人の幸せって、前方からやってくるものではなさそうです。今日という日を一生懸命、前へ転がって生きていくことで得られるもの

のようです。考えてみれば、精一杯転がってこうして生きていること自体が、幸せなのかもしれません。幸せはいつも自分の心が決めるのです。

そして最後に、私は皆さんに願う、今、話してきたような強い思いはあります。しかし、私は 62 年生きてきて、人生ってうまくいかないことも山ほどあるから、肩の力を抜いて「なるようになるさ」くらいの気持ちで過ごして欲しいなという思いも片方ではあるのです。そんな歌を 3 分くらい、最後に皆さんに聞いてもらって最後の校長講話とします。

「今日までそして明日から」(作詞：吉田 拓郎 作曲：吉田 拓郎)

わたしは今日まで生きてみました

時にはだれかの力をかりて

時にはだれかにしがみついて

・・・

時にはだれかにうらぎられて

時にはだれかと手をとりあって

・・・

明日からも

こうして生きて行くだらうと

わたしにはわたしの生き方がある

それはおそらく自分というものを

知るところから始まるものでしょう

けれど それにしたって

どこで どう変ってしまうか

そうです わからないまま生きてゆく

明日からの そんなわたしです

・・・

そして今 わたしは思っています

明日からも

こうして生きて行くだらうと

立志式

2月3日(月)に、墨坂中学校の伝統行事である「立志式」が挙行されました。今年度、56回目という歴史を誇ります。「全体の部」では、美術部員が制作したステージバックが披露され、実行委員長による学年代表あいさつ、立志の歌「立て心よ」と「決意」の披露、校長先生からの激励の言葉がありました。その後、クラスごとに「学級の部」が行われ、一人ひとりが、クラスの仲間と保護者の皆様の前で、立志の決意を発表しました。



【2年生の学級通信より】

○今日は立志式があったけど、しっかり自立する覚悟とか、そういう気持ちで話を聞いたり、発表できたりしてよかったです。完全にいまから自立します!なんて無理だけど、少しずつ自立していけるようにしたいと思いました。あと、みんなの作文がとても素敵で一人ひとりそれぞれの思いがこもっていいと思いました。



○立志式があった。歌はこれまでの指導を思いだしながら歌えた。でも出だしがうまくいなくて残念だった。決意の発表では少し緊張したけれどしっかりと発表することができたと思う。この決意を口だけにせず行動で示したいと思った。

○今日は、立志式がありました。まず、全体の部では、美術部の人がとても大きな絵を描いていて、すごいなと思いました。合唱でもしっかりと声を出して歌うことができたので良かったです。学級の部の決意発表では、練習の時は笑ってしまう場面もあったけど、本番では、みんな集中して発表できていてよかったです。

中学校新入生説明会

2月4日(火)には、来年度墨坂中学校に入学する小学6年生とその保護者のみなさんを対象にした中学校説明会が行われました。



これまで準備をしてきた1年生が校歌合唱を発表し、その後代表生徒が中学校生活の様子を説明しました。この1年間、先輩の姿を見て学んできた1年生が、4月からはいよいよ「先輩」になります。発表も立派でしたが、発表を待っているときの姿も素晴らしく、この1年間での成長を感じました。

【1年生の学級通信より】

○新入生説明会がありました。私は校歌を歌っただけだけど、きれいに自分の本気を出せて良かったです。小学校の頃の先生がいて、会ってすごく話しかかったです。入場と退場の仕方もちゃんとできて良かったです。私が去年、新入生説明会に来てから、1年も経ったことにすごく驚きました。あと、アドバンスタイムも静かに集中してできて良かったです。



○来年墨中生になる6年生がきました。私が去年来たときには、今の2年生が歌っている校歌を聴いた時、とても声がきれいで迫力がありました。だから、新入生に「すごい!」と思ってもらえるように、言葉をハッキリさせて、めっちゃ声を出しました!「かっこいい!」って思ってもらえる先輩になれるように頑張ります!

日常の様子から



【音楽集会】

3年生はこの日、公立高校前期選抜のため、給食後に下校をしました。1年生と2年生で「君が代」と「校歌」の合唱練習をしました。卒業式に向けた準備が始まっています。



【授業公開 1年3組英語】

役割演技をしながら英語を読みました。単元名「READING FOR FUN」のとおり、みなノリノリで演技をしながら、それぞれのセリフを発表する姿がありました。

【調理実習】

1年生の家庭科では、調理実習をしています。この日は、鮭のホイル焼きをつくり、給食に合わせて一緒にいただきました。上手にできたようで、写真を撮りにいったときにはすでにほとんどの生徒が食べ終わっていました。



HIT 防止研修(非違行為・いじめ・体罰防止研修)

今年度も、県内外教職員による不祥事があり、学校や教育に対する信頼を損ねるような残念な状況が見られています。墨坂中学校では、非違行為・いじめ・体罰を防止するための研修(HIT 防止研修)を継続して実施しております(職員会議のなかで時間を確保し、資料等をもとに少人数で話し合い、その後振り返りを記入し、さらに全体で共有しています)。今年度は、これまでに、体罰や暴言の防止・いじめ防止・性暴力の防止・交通安全・飲酒運転の防止・モラルハラスメントの防止・個人情報の管理の徹底等についての研修を行ってまいりました。

これからもさらに研修を積み重ね、教職員による非違行為・いじめ・体罰等が起こらないように全力で取り組んでまいります。皆様のご理解・ご協力のほどよろしくお願いいたします。

○学校生活について、心配なことや不安なことがありましたら、遠慮なく学校までご連絡ください。
学級担任はもちろんのこと、教頭や養護教諭もお話をお伺いします。(墨坂中学校:Tel026-245-0564)
また、下記の相談窓口にご相談いただくこともできます。
24時間子供SOSダイヤル 0120-0-78310
こどもの人権110番 0120-007-110
信州ネットトラブルバスターズ(ネットトラブルの対応と相談先をまとめたWebページ)

